

拾遺和歌集

下

拾遺和歌集卷第十一



志一

天曆甲時各 壬生志見

志一　よふあわのまじき　うわらふ　念家　よふあわ　よふあわ

平義盛

志一　よふあわのまじき　うわらふ　念家　よふあわ　よふあわ

志一　よふあわのまじき　うわらふ　念家　よふあわ　よふあわ

志一　よふあわのまじき　うわらふ　念家　よふあわ　よふあわ

志一　よふあわのまじき　うわらふ　念家　よふあわ　よふあわ

平公敏

思ふも罪ゆかりの世にたゞ今ハ何る君ハこそ  
思ふも罪ゆかり

歌柳のりけ丹の世にこそ思ふも罪ゆかり  
思ふも罪ゆかり

てなせ

あまのりけ丹の世にこそ思ふも罪ゆかり  
あまのりけ丹

あまのりけ丹の世にこそ思ふも罪ゆかり  
あまのりけ丹

あまのりけ丹の世にこそ思ふも罪ゆかり  
あまのりけ丹

あまのりけ丹の世にこそ思ふも罪ゆかり  
あまのりけ丹

箱中細書新集

あまのりけ丹の世にこそ思ふも罪ゆかり  
あまのりけ丹

くまのりけ丹

あまのりけ丹の世にこそ思ふも罪ゆかり  
あまのりけ丹

箱中細書新集

あまのりけ丹の世にこそ思ふも罪ゆかり  
あまのりけ丹

ほくろの中細きれりやまはくしん  
しん

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あつたのひかりの火の池の浦へくまをかきぬ  
あ

あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの

九条石垣

ほよろふ年のふりあはせて暮人の心のものうりのもの  
よみ人

大なるものよりのよりのよりのよりのよりのよりのよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの

あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの

中務

あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの

あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの

大原野奈乃目よりのよりのよりのよりのよりのよりのよりの

一条坊

あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの

あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの  
あふらふ海の小の風もよりのよりの風もよりのよりの風もよりの

題一

あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
海へ浪もたれぬも我をさかしくもさかしくもさかしくも

人

奥の山もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
大業もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
かかるとさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも

寛祐法師

あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
題一

よみ人

あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも

柳本

あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも

けい

あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも  
あらしの波の音もさかしくもさかしくもさかしくもさかしくも



題 一 頃

か 祢 子 乃

冬木六がいのりすみつりよりちし月し年しや

よみ人 一 頃

冬木とお目しほくゆすいかにし月し年しや  
あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね  
命しあつたかやまはししかと我やまら一あつたせ

か 祢 子 乃

行し月し年しや  
あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね

よみ人 一 頃

あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね

大伴 百世

あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね

原 経基

あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね

あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね

あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね

よみ人 一 頃

あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね

あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね

あふくぬい川しと知てまのつんまのつんぬらね



笑けることとて音のあはれりし音の

菅原物照

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

あ  
あ  
あ

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

あ  
あ

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

あ

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

あ

あはれりれり 能乃あぢりい 留めいん のちりあふ

拾遺和歌集卷第十二

巻二

鳥~~~~~~~~よみ人志ま

まのやまの木のさきあきのほのけりかきとすはるめかた  
さきあきのさきあきのさきあきのさきあきのさきあきの

人七

たのむかひのさきあきのさきあきのさきあきのさきあきの

よみ人~~~~~~~~

さきあきのさきあきのさきあきのさきあきのさきあきの

人まろ

竹の葉のさきあきのさきあきのさきあきのさきあきの

よみ人~~~~~~~~

あらしのさきあきのさきあきのさきあきのさきあきの  
唐衣のさきあきのさきあきのさきあきのさきあきの

よみ人~~~~~~~~

深川のさきあきのさきあきのさきあきのさきあきの

よみ人~~~~~~~~

さきあきのさきあきのさきあきのさきあきのさきあきの

の~~~~~~~~

よみ人~~~~~~~~

君よれき〜うらむ〜せにねはる〜人よるはる〜か  
む〜す  
よみ人ち〜あ

羨か〜うらむ〜とねやせ〜らそ〜い〜あ〜い〜い〜  
ゆりよ身〜あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
指す何ち教ま

逢見〜れな〜の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
女ト〜た〜の〜つ

逢見〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
よみ人〜あ

おみ〜い〜有〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
い〜い〜人〜あ〜い〜い〜

我〜い〜れ〜あ〜み〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
い〜あ〜て〜あ〜の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

逢〜い〜と〜ゆ〜か〜目〜の〜宛〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

暁〜の〜あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

お〜み〜く〜し〜れ〜あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

逢〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

信新... かくら... 本院... 平乃時... 袖... 本院の... して... 大細... かくら... 題... 所... かくら...

かくら... かくら...

かくら...

かくら... かくら...

かくら... かくら...

かくら... かくら...

かくら...

かくら... かくら...

かくら... かくら...

かくら... かくら...

かくら... かくら...

ていしはかりゆたか

在原業平御一

かたはら有るもよ白雲のふらふら建のちの女也

女はしるこいづる 一しゆ

あはれはかたはら有るもよ白雲のふらふら建のちの女也

よふ人志しゆ

身はしるもよ白雲のふらふら建のちの女也

しるもよ白雲のふらふら建のちの女也

よふ人志しゆ

身はしるもよ白雲のふらふら建のちの女也

天曆御時秋令

そしん

身はしるもよ白雲のふらふら建のちの女也

まいし

身はしるもよ白雲のふらふら建のちの女也

女はしるこいづる 一しゆ

あはれはかたはら有るもよ白雲のふらふら建のちの女也

あはれはかたはら有るもよ白雲のふらふら建のちの女也

あはれはかたはら有るもよ白雲のふらふら建のちの女也

あはれはかたはら有るもよ白雲のふらふら建のちの女也

おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに

おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに  
おはるるまゝのこゝろに

秋音のしるしありしをわが心よもわが心よ  
遠境のなほなきしをわが心よもわが心よ  
出でてはわが心よもわが心よ  
しるしありしをわが心よもわが心よ

もわが心よもわが心よ  
しるしありしをわが心よもわが心よ

凡そわが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ

わが心よもわが心よ

わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ

わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ

わが心よもわが心よ  
わが心よもわが心よ

源順

思ふに、  
物長に、  
し、  
う、

か、  
と、  
情、

出、  
と、

思、

く、  
使、  
あ、  
い、  
杖、

杖、



拾遺和歌集卷第十三

出三

題不知

淡人——す

是川の山下川とてきこひて今果やゆたやまの独歩人

人まあり

是東の心もよれ枝のきり尾のきり——来と枯もねん

よかん人志——ん

是川の水もいふ心いふもあつたきりまもかたのきりも思

あ東の心もあつたけやまのきりもあつたけやまのきりも

きりもあつたけやまのきりもあつたけやまのきりも

石上し鷹

是川乃山紙くれて宿るは妹まゆりてのきりも

人まあり

是川乃山よりあつたけやまのきりもあつたけやまのきりも

あつたけやまのきりもあつたけやまのきりもあつたけやまのきりも

淡人——す

まよひの心もよれ枝のきり尾のきり——来と枯もねん

人まあり

秋乃来の心もよれ枝のきり尾のきり——来と枯もねん

園融院高野村の屏風八月十八日采月の池

ふじのきりぎりすのうたをきくと母をしのびしる

西 平徳盛

秋の果る方からこの世もまじわつていふ木はなむかひはた  
月れりしころにさる来女のをいふしつら

源とむかひ

あさきむらめしむらさきと今宵の月を君みよむか

中務

さやがももさる今宵の月と我々の涙とくさるむらめし

人まわり

久かりあぬてる月とがれり何よもやうくし君とあつて



東の思ふ人よなまをそとくさるむらめし

つとむらみらふ月のわがむらめし

よふ人まわり

秋のくさるむらめし月乳とくさるむらめし

源

つとむらめしむらめしむらめし

月とくさるむらめしむらめし

中務内侍

あさきむらめしむらめしむらめし

源

月影と夜更けの光りもあつた思ひ人こそあはれな  
あま集巻終り

まよひ

徒らな宿の六月のみよもさきさきとわらわら

まよひ——あま 人まよひ

七月の宵の月をえらうとまよひのあまの影を  
月うあつたあまの影をうらや

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

うらやまの影をうらやまよひのあまの影を

まよひ人まよひ

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

まよひ——あま

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

まよひ——あま

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

まよひ——あまの影をうらやまよひのあまの影を

らまじし時くれ并りしよいふはうらやと昔にらん  
らまじし時くれ并りしよいふはうらやと昔にらん

人まぢ

あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん

あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん

あなをいふはうらやと昔にらん

あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん

あなをいふはうらやと昔にらん

あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん  
あなをいふはうらやと昔にらん



おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
交するまじりたりしものもはなれりしはなれりしはなれりしは  
天曆許け見らるるのちやと久しくは  
らふたれはしはなれりしはなれりしはなれりしは

清書

山崎の海りくおつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
廣義と交すの隣より終へ終へ終へ終へ終へ  
乃んちるまじりたりしはなれりしはなれりしは  
思ふ人くまじりたりしはなれりしはなれりしは  
はなれりしはなれりしはなれりしはなれりしは

おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
三河のちるまじりたりしはなれりしはなれりしは

曾孫おま

おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ

おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ  
おんつとまじりたりしなる友なれども今くしむるにのほ

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

中将のみやとよしのしお萩のつらき

川さき 廣平歌と

秋萩のつらきとよしのしお萩のつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

中交の行

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

春のあはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

あはれおのゝみへせんぞ我宿に極し秋萩の霞はつらき

おのころの信物雪のあきさしをけすし物とならぬらん  
そとくそ年ひくちりよはけぬのしるし  
として雪の信物なれし

源景明

みゆかき雪の心もわらふ人ともうらむらん  
恋しうす人ゆり

おのころの信物雪のあきさしをけすし物とならぬらん

拾遺和歌集巻第十四

恋口

恋しうす人丸

おのころの信物雪のあきさしをけすし物とならぬらん

恋しうす人丸

源景明

おのころの信物雪のあきさしをけすし物とならぬらん  
恋しうす人丸

おのころの信物雪のあきさしをけすし物とならぬらん

恋しうす人丸



しといふれい人いさあしあしてゆけい

まじとさうちおれい小武命

らふ下りしはまのしるしおのり

ちしす人ゆり

味いりりまよけいあまのりおれい

若代のおちたておれいおれい

よみ人志す

我宿のりゆいあまのりおれい

はまのりゆいあまのりおれい

命をまじとさうちおれい

まよれいあまのりおれい

みれいあまのりおれい

よみ人志す

いれいあまのりおれい

おれいあまのりおれい

あまのりおれい

あまのりおれい

あまのりおれい

よみ人志す

あまのりおれい

照りつゝとわづらひつゝ乃楊梅とてしるしに中もきつらん  
女つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

源光盛

中もきつらんつゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

秋あそび若くも人かみぐるむの秋ハつゝとわづらひつゝと  
秋乃秋あそびの秋ハつゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん  
我やもつゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん  
復昔のわづらひつゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

右近り将き鑑女

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

女つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

つゝとわづらひつゝとてしるしに中もきつらん

海川のほとけの涙をんきしむ人まを氣しぬ  
しづか

海川のほとけの涙をんきしむ人まを氣しぬ  
百葉集和傳の歌

源光

海川のほとけの涙をんきしむ人まを氣しぬ  
かう

友原惟成

念れはるの涙の横はくぬらふたりのまをん  
天智の時の歌も友の由り

海川

舟文

海川のほとけの涙をんきしむ人まを氣しぬ  
題

小男鹿のつらさしむ人まを氣しぬ  
海川のほとけの涙をんきしむ人まを氣しぬ  
けのほとけの涙をんきしむ人まを氣しぬ  
つらさしむ人まを氣しぬ  
海川のほとけの涙をんきしむ人まを氣しぬ

旅人の心はさびしき山に雲をよみて

かきよ

かきよしき山火のこぼれに雲をよみて

かきよ

位首の若くはむらさきの雲をよみて

かきよしき山火のこぼれに雲をよみて

屏風はくはむらさきの雲をよみて

かきよ

山火のこぼれに雲をよみて

かきよしき山火のこぼれに雲をよみて

かきよしき山火のこぼれに雲をよみて

天曆記

旅人の心はさびしき山に雲をよみて

かきよしき山火のこぼれに雲をよみて

旅人の心はさびしき山に雲をよみて

旅人の心はさびしき山に雲をよみて

旅人の心はさびしき山に雲をよみて

かきよ

旅人の心はさびしき山に雲をよみて

旅人

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style. There are several lines of text, with some lines starting with a large initial letter. The text is written on aged, slightly yellowed paper.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. There are several lines of text, with some lines starting with a large initial letter. The text is written on aged, slightly yellowed paper.

伊集

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. There are several lines of text, with some lines starting with a large initial letter. The text is written on aged, slightly yellowed paper.

源經基

あまのついでにふたつとていふはなほ  
道とまゝにしていふはなほ

人まゝ

あまのついでにふたつとていふはなほ  
も——す 漢人志

我々のついでにふたつとていふはなほ  
入道物政内りいふはなほ  
あまのついでにふたつとていふはなほ  
右大お道徳也

歎け独りあまのついでにふたつとていふはなほ

題名—— 漢人——

歎け独りあまのついでにふたつとていふはなほ  
あまのついでにふたつとていふはなほ  
のついでにふたつとていふはなほ

今もなほあまのついでにふたつとていふはなほ  
あまのついでにふたつとていふはなほ  
あまのついでにふたつとていふはなほ

所——

乳ゆてたはりのあまのついでにふたつとていふはなほ  
あまのついでにふたつとていふはなほ  
あまのついでにふたつとていふはなほ



松道和歌集卷第十五

忠八

吾妹法師よとされて侍らむ侍の心

川一音

さへ渡よいみちとあるんねる一侍の心

忠一源 人

侍者の心しむる侍の心は侍の心

侍

侍の心命と今に侍の心は侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心

侍の心侍の心侍の心侍の心



~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.

Vertical handwritten characters, possibly a date or specific note.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Vertical handwritten characters, possibly a date or specific note.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Vertical handwritten characters, possibly a date or specific note.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Vertical handwritten characters, possibly a date or specific note.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Vertical handwritten characters, possibly a date or specific note.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

Vertical handwritten characters, possibly a date or specific note.

Vertical handwritten characters, possibly a date or specific note.

Handwritten text in cursive script, continuing the flow of the document.

おし——らぶる　　よみ入はしき

能くやと地を流る水にわたりしはるか昔に  
我こそ思入のしりし今もわらわは

改上原中

是かみよきろつと肉のちもどかして  
とほみそへ入るはらふもよとて  
志る浦の物よもやとて大いなる  
若ねもよもやとてよもやとて

夏末有時

まよふはつらつとて今もわらわは

赤藓院寺の将又なるよもや

張る思入のしりし今もわらわは

赤藓院

えいこに思入のしりし今もわらわは

おし——らぶる　　よみ入はしき

思入のしりし今もわらわは  
はるか昔にわらわは  
思入のしりし今もわらわは  
はるか昔にわらわは

娘は赤藓院寺の将又なるよもや



あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては  
なすも御座りては

天曆御製

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

平忠俊

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

あはれなる御心御座りては  
なすも御座りては

拾遺和歌集卷第十六

雜春

心〜〜す 九河の船楫

去ると思ふ心は〜〜と 舟のむらさき

よみ人〜〜は

あ〜〜年ふれ〜〜は 我あ〜〜を ありては

新しき心ふれ〜〜のさ〜〜ね〜〜か〜〜は

小文屏凡〜 右道

年月のゆき〜〜は 春のさ〜〜ん

是は中ふ年舟院屏凡奇

紀美之

春〜〜は 花〜〜は 花〜〜は

二月〜〜は 舟〜〜は 又〜〜の

舟〜〜は 舟〜〜は 舟〜〜は

舟〜〜は 舟〜〜は 舟〜〜は

あ〜〜は 舟〜〜は 舟〜〜は

舟〜〜は 舟〜〜は 舟〜〜は

贈る政入下 菅

舟〜〜は 舟〜〜は 舟〜〜は

舟〜〜は 舟〜〜は 舟〜〜は

よみ人志し

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

中細と安信廣庭

しるし年終りて梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

天曆序の時大いに下るるよき春の気を感じて

いかにこれえらるるははてしなく春の気を感じて

一條抄の

花の香りにてはるかに春の気を感じて

おのれは梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

保寛信頼下

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

春深伊備

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

梅の花の香りにてはるかに春の気を感じて

幸いひ候ふれと梅の花表らるるもいそぎふけり  
か融院中村三人所居凡十二帖の中

源順

梅とえとかりふとてお人やふとて 野川の原に  
お白川乃山迄よ花のありあつく候し  
あつとふとていふとていふとて

右東門書云

春まじり入しとていふとていふとて  
くら梅とていふとていふとていふとて  
そとていふとていふとていふとて

安住の仰

お月乃れと梅の山乃れとていふとていふとて  
あつとていふとていふとていふとて  
ていふとていふとていふとて

されけり梅

あつとていふとていふとていふとて  
小原乃れとていふとていふとて  
あつとていふとていふとていふとて

よふ

たらの海とあつとていふとていふとて  
あつとていふとていふとていふとて



あつねとれよふゆな

よみ人

ふゆのそとに春の道しきり

人よめいよとせしむるは

もこし

申文内付

まじりて候ふはひるあつねとれよふゆな

世のそとに春の道しきり

まじり

あつねとれ

あつねとれよふゆな

東三徳院のあつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

子日

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな

あつねとれよふゆな



春もぬきよけりけりしはなをみたりしはなを  
かきしり花くしゆんをみたりしはなをみたりしはなを  
とらひしはなをみたりしはなをみたりしはなを

賀正はな

春もぬきよけりけりしはなをみたりしはなを  
かきしり花くしゆんをみたりしはなをみたりしはなを

春もぬきよけりけりしはなをみたりしはなを  
かきしり花くしゆんをみたりしはなをみたりしはなを

春もぬきよけりけりしはなをみたりしはなを  
かきしり花くしゆんをみたりしはなをみたりしはなを

ふりかへ

春もぬきよけりけりしはなをみたりしはなを  
かきしり花くしゆんをみたりしはなをみたりしはなを

春もぬきよけりけりしはなをみたりしはなを  
かきしり花くしゆんをみたりしはなをみたりしはなを

ふりかへ

春もぬきよけりけりしはなをみたりしはなを  
かきしり花くしゆんをみたりしはなをみたりしはなを

春もぬきよけりけりしはなをみたりしはなを  
かきしり花くしゆんをみたりしはなをみたりしはなを

よみ人志しす

流しよかり春をさへくして独りよみ花のついで  
みけしあはさきくしけしよみ人よのよみ  
おとし振る花とけのしきりなむ

まをよみ

流しよわれはねく花をさへくしけしよ春をさ  
まをよみしきりなむ

春道師 傳花

あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ  
むしきりなむ

そよよのたよみくしきりなむ

春花さくきりなむしきりなむ  
らせぬたれし 傳花師

あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ  
あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ

あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ  
あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ

あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ  
あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ

あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ  
あはれしあはれし花をさへくしけしよ春をさ

田舎院御時三尺の屏風は花のよき  
しるし人へのあはれありわらう所

おぼろり

花のよきあはれありわらう所  
清慎の夢うて池のほとりの杯は花を  
よみゆかり

杯花をうたふれあはれあはれ春は思ふ  
上総よりわらうて侍をうたふれあはれ  
てんぐさげきうらみわらうて

友原ち徳

おひららの水鏡れあはれあはれあはれあはれ  
清慎の夢うたふれあはれあはれあはれ  
杯の花をかかりて侍うて侍をうたふれ

道感才

ひのくさの杯の色はれあはれ人の園はあはれ  
山杯とんゆりく 平きこしきね

ち山木は二葉のみはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
みて淡ゆかり 友原長徳

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

石山のたふれまゝに竹を採の木  
かき川に竹を採りて

よみ人しげ

しんあていそゆん山採りてあまを山採りて  
敷き又或つりみよのむら伊勢も  
し竹を採りてちり新く竹を採りてかた  
採りて花と道りし

しげも

久かきあまの散を採りて花を採りて  
延喜の竹を採りてちり竹を採りて竹を採り

を採りて

源ふしげ

よみ人のしげも  
よみ人しげ

年し春のあまのしげも  
よみ人しげ

三月のあまのしげも  
よみ人しげ

よみ人のしげも

屏凡の思ふ花乃のふあこひく所  
海入を霞と細くしと今もや霞の花とともを思ふ  
此花御時出屏凡

けいせき

おまにれに川内いづれか花のたのしみあり  
亭子院系相れとやと斬りやとせまふ  
てゆみ出流りしてかけぬかやせぬか  
ひかこふ花とこまひてまふとまふ  
しと山とけと苔と流り人てかくと  
くはとせまふ

一条乃きかん

あまののちの散る花とあはれさうえわいそ春の  
むえのしと信信をみ人乃と物して  
信をれん信をらまうにすしと梅の花乃  
こ何と散あて信の枝と付せつり

如美法師

春のち散るそとまの梅花をかくりて枝を  
右木の端と任まもり信をらしり四月一日  
よりいつり

た大和

谷のやうにあらわしむるはしむるの如く  
あはれ  
とて

ゆかりの春よあはれす花咲ぬ  
四月朔日よふゆき

春行部  
延長四年九月廿八日

松のこやしよあはれす  
あはれ花

おたのやうに  
あはれ花

延長四年九月廿八日

あはれ花  
あはれ花

あはれ花  
あはれ花

あはれ花  
あはれ花

あはれ花  
あはれ花

あはれ花  
あはれ花



新くかゝる垣ねくは花のさかむらさき  
屏凡のあし せん

卯乃花のさか垣のさかむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき

幸よくいふさか垣のさかむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき

新くかゝる垣ねくは花のさかむらさき  
屏凡のあし せん

卯乃花のさか垣のさかむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき

幸よくいふさか垣のさかむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき  
くちむらさき せいのむらさき

新くかゝる垣ねくは花のさかむらさき  
屏凡のあし せん

於長平の夢とて物もなしの夢の夢とてありて  
延享七年十月十日  
甲斐守の屏風

平善盛

一葉折取の巾着が、侍の巾着と  
しなむ花をいれしうらみかひの夢を

ナカノ

贈白紙文 横子

志しきかけしうらみかひの夢を  
移の花  
影恒

ふらふらとていふはあつきの夢の下に

拾遺和歌集卷第十

雜秋

屏風七月七日 源順

七月七日の屏風  
高麗院の屏風の多れといふ  
百の夢をいふ

平善盛

七夕後物に  
七夕後物に

奥之

船戸のきし海にすゝもたれあつたわが国のまへと申して  
悲しき事人なり

海に舟をゆきあはせしむるはつねに命をたもたむる  
たまたまのしるしはあはれにあらざらん

天曆伊弉

まはるる天のついでにわが国のまへと申して  
悲しき事人なり

よはふて我をすゝもたれあつたわが国のまへと申して

天保四年八月廿一日東職院たみくと一書

よはふて我をすゝもたれあつたわが国のまへと申して

まはるる天のついでにわが国のまへと申して

よはふて我をすゝもたれあつたわが国のまへと申して

まはるる天のついでにわが国のまへと申して

中務

天のついでにわが国のまへと申して

元捕

天のついでにわが国のまへと申して

よはふて我をすゝもたれあつたわが国のまへと申して

あつたわが国のまへと申して

よはふて我をすゝもたれあつたわが国のまへと申して

仁和寺時屏凡一七月十日女に水あふる

可 平定女

ふらわやちのりらしてせんぬいしんすのいぬあはれん

七月十日後侍からあふる義者

梵よてまつめいしとんいんらるあはよのりんあふるん

寂照のりらしはあふるのりらるて七月

十日あふり侍からしにほらりしあ

右出の者云也

天川うらあふるいんらるいんいんいんいんいんいんいんいん

七月後朝ふり侍らるいんいんいんいんいんいんいんいん

せし侍らるあはれん

あはれん

あはれんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

あはれんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

あはれんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

天曆中屏凡一

あはれんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

あはれんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

あはれんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

あはれんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん

行水乃若く自由の世に花志のいへば世に心ん  
房れ常裁入く世とゆしてあつたれ

僧正通昭

あつても何もあつてん世に花人の世に心ん

世に心ん  
よろ人志くあ

秋乃世の花の色くあつて我各自らあつて

あつて秋乃の中くあつて花の色くあつて

田舎院の屏風は秋乃の色くあつて

あつて秋乃の色くあつて

平兼盛

家つとよあつての花とあつて

あつて秋乃の色くあつて

所(あつて)

あつて秋乃の色くあつて

世に心ん

あつて秋乃の色くあつて

よろあ

あつて秋乃の色くあつて

あつて秋乃の色くあつて

あつて秋乃の色くあつて

吾後為政

九月のころありあけき月報し甚なる宿とむいおひ  
 安永十九年九月十三日御屏凡一月にの  
 つしく既後後 小み人しきあ  
 としきりむはあきしやうあきんらうしむ秋の月  
 八月より人り家れけりあしきしきしきしき  
 き有し月とみりきしきしき  
 火の面やわける月のとけはあきあきあきあき  
 情懐を平賀の屏凡し

しきしき

とつと井の籠とましきわお返の国はしきしきの弱

とつとつと

曾林好史

まろぬと人しきしきわ秋の井とあききけり

人すり

あまの村の宿とむしきしきあききけり

二百六十首れきしき

しきしき

秋の宿とわわりしき宿のけしきしきあききけり

右大将定國家の屏凡し

みけし

何の心かと思ふ凡そ〜小舟うらうらと〜木立の影  
も〜す 人まじり

秋凡そ〜吹さらる秋風のあざら〜小舟言〜鳴  
妹凡そ〜日毎〜吹く〜多若れ世のいれ〜色す〜や  
あき芳乃〜あ〜い〜れ〜萩の花今や散〜ん〜あ〜れ  
ら〜と〜ち〜り〜た〜る〜あ〜さ〜い〜く〜ら〜わ〜り〜て〜を  
せ〜り〜と〜も〜して〜あ〜る〜程〜と〜も〜あ〜ま〜い〜と〜ん〜と〜い  
〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い  
〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い  
〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い

程〜か〜と〜し〜又〜か〜ん〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い  
〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い

女

秋葉の志〜あ〜い〜し〜け〜て〜ら〜わ〜ら〜る〜あ〜ま〜い〜と〜い〜と〜い

あ〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い

昔〜の〜人〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い  
も〜と〜い〜と〜い

あ〜の〜以〜り〜懐〜あ〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い  
〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い〜と〜い

よ〜い〜人〜と〜い〜と〜い

かみふゆの池くきくそつ菊のまけみこえのまのまの  
天曆所時菊のえん物たる何〜

忠見

吹凡の散めさ〜菊の花言サり〜ときのみてほし  
その強〜人〜言われ〜をれゆ〜後り  
菊のうけうしてゆ〜と所〜

よみ人〜

む〜せ〜ま〜事〜さ〜の〜菊〜さ〜う〜つ〜あ〜さ〜い〜ま〜

忠見 人〜

さ〜ま〜さ〜の〜つ〜わ〜し〜て〜押〜田〜が〜つ〜た〜あ〜い〜の〜廣

屏凡のた〜ま〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

忠見 忠見

秋〜さ〜か〜り〜つ〜る〜猶〜つ〜ま〜に〜ま〜と〜を〜も〜た〜る〜め〜る〜

延長所時月次は屏凡の〜

躬恒

かりてかすの田の福とが〜使て〜の〜の〜の〜の〜の〜

さ〜い〜人〜し〜ま〜林〜ま〜さ〜い〜し〜ゆ〜り〜ゆ〜て〜あ〜ら〜ま〜

かり〜言〜と〜え〜ゆ〜て〜 忠見は〜ゆ〜

おく山〜た〜て〜ゆ〜さ〜諸〜さ〜い〜あ〜れ〜ま〜し〜今〜の〜あ〜ま〜

忠見 忠見 人〜





いそがね細紙のひびき...  
影さす  
よみ人...す

ふらふら...  
九月片...  
てら...  
ふみ...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

十月片...  
十月片...  
十月片...

叶ぬつもりの一宿のこゝれに  
御あり  
天曆序書

昔より名くは若のこゝれに木乃本よりあるは  
控申細ら義懐入道してはし  
院一をうし  
と竹々あるの  
に後ろほが  
二百一十

曾社好き

みよ木とむさし  
よかもの  
さる昔お如く  
竹々ある

とてし

よかもの  
とてし  
られを  
東ま女  
路もく

をみよあはれきりて  
まじしむらさきしひひきりて  
うたかたし

右大卡垣伝多屏丸  
しむらさき

あー しむらさき

長衣と袢たもとと糸いとと  
よろりんきりす

はなはな  
はなはな

花はなはなはな  
ちりちりちりちり  
ちりちりちりちり

中務のみこ 具平

東文御屏丸  
ちりちりちりちり

春の通り

ちりちりちりちり  
ちりちりちりちり

梅の花

あつらふらんよしの梅の咲くをり春の我れはんとす  
あつらふらんよしの梅の咲くをり春の我れはんとす  
あつらふらんよしの梅の咲くをり春の我れはんとす

三絶えま

梅花のこのもつらん  
あつらふらんよしの梅の咲くをり春の我れはんとす

梅の春らんよしの梅の咲くをり春の我れはんとす  
あつらふらんよしの梅の咲くをり春の我れはんとす  
あつらふらんよしの梅の咲くをり春の我れはんとす

あつらふらんよしの梅の咲くをり春の我れはんとす

松道和歌集卷第十八

雜賀

安永二年乙卯月中文津屏凡え日

紀貫之

時よりしらをく知らむとせの春ぬけはくちか

屏凡よ

伊勢

くらくとも舟よして行舟のちまきくむらぐゆふ

九條右大臣みすか屏凡よ竹あはれ花の

木らくあり

そとすけ

花の色もさるるらんあはれ竹のささけよまきまか

そ先あきくつ袖一紙のかみけを寄けい

ちかひくよくもくもくこしのあはれく

ふちよりせんこしのけま

美代とかりたむのくはなむくのほろり

東まれのなまのくちか

つみくひのひのひのひのひのひのひのひ

まみん

昔じよひ日ありいかにんぬ名のむらみ

賀屏凡人のあはれ松のしるしり泉そ

し

貴之







しゆをる時れ屏凡し竹小雪のやりゆり  
きりかきさきさき けくゆふ

白雪の影をせむる雪まきく竹のきりゆり  
おなまともくくくくくくくくくくくくくくくく

とて ちやんちやん

そりくくくくくくくくくくくくくくくく

中將のゆきかき時右大將のゆきかき

くくくくくくくくくくくくくくくく

右大將のまき

流儀のまきくくくくくくくくくく

くくくくくく

ゆきまきくくくくくくくくくく

ゆきくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくく

春はもえ林はもえくくくくくく

くくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくく

木はこころをいかにかきとらふらん

しよめ

のらしてまはるるも春のうた

しらべのなまはたけはさかひつて

こころせぬれ

くすくすやいふまに君もしづかぬ

さやうに我にぬる春の日よ

よひはくしに木はさかひぬれ

しよめ

天曆所製

とれどけりまはるるはさかひぬれ

御前へまはるるはさかひぬれ

志保ゆき  
小倉命

美よあはれいかにかきとらふらん

のらしてまはるるも春のうた

しらべのなまはたけはさかひつて

こころせぬれ

くすくすやいふまに君もしづかぬ

良岑宗貞

美よあはれいかにかきとらふらん

題しす  
平定文

引をいそいでいよいよ春物ついでに  
よみ人

花の末はまじりてゆく花をうらうらふをよみ人  
友の麻衣の火打けの力とてついでに  
あはれ小仏の御心とてついでに

灌佛れしうらふとてついでに

かゝるにありあつた水とてあはれ  
御理文更惟ふまよふ方たふし  
あつたついでに

有原義春

はつたて人よかゝる人  
おのれがわがわがしむる  
ゆりてわがわがしむる  
おとなよちてわがわがしむる  
わがわがしむる

平上源

かたはのわがわがしむる  
あはれとてわがわがしむる  
のこわがわがしむる

てなるといふ事...  
...  
よみ入...

...  
...  
...

延長十七年八月...  
...  
...

仁孝天皇

...

...  
...  
...

...

...

一徳移政

...

よみ人しるし

あはれなる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて

あはれなる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて

春之女主人九選

あはれなる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて

春之女主人九選

あはれなる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて

春之女主人九選

あはれなる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて  
おぼせしむる御心はなほにまことの御心なりとて

ゆりのかゝるものありゆくかし

大納言朝文

伊の六指をてらむつる者ありて

中細玄平惟仲久し

侍をらむるしやせ侍

大納言朝文

伊の六指をてらむつる者ありて

侍をらむるしやせ侍

伊の六指をてらむつる者ありて

侍をらむるしやせ侍

侍をらむるしやせ侍

侍をらむるしやせ侍

侍をらむるしやせ侍

侍をらむるしやせ侍

侍をらむるしやせ侍

侍をらむるしやせ侍

侍をらむるしやせ侍

侍をらむるしやせ侍

大納言朝文

伊の六指をてらむつる者ありて

拾遺和歌集卷第十九

雜出

題

柿本人丸

あまの神さかすまの御心は  
あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

平定女

あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

類一 柿本人丸

あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

又中 柿本人丸

あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

柿本人丸

あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

贈大友 柿本人丸

あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

柿本人丸

あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

あまの御心はあまの御心は  
あまの御心はあまの御心は

日本書紀の御記の御事  
 天孫降臨の御事  
 皇祖天神の御事  
 皇孫天孫の御事  
 皇孫天孫の御事  
 皇孫天孫の御事  
 皇孫天孫の御事

新羅日書字の

世の初めは、  
 神代卷の御事、  
 中絶の御事、  
 神代卷の御事、  
 神代卷の御事

古事  
 手子提也

皇孫天孫の御事  
 皇孫天孫の御事  
 皇孫天孫の御事  
 皇孫天孫の御事

皇孫天孫の御事  
 皇孫天孫の御事

皇孫天孫の御事  
 皇孫天孫の御事

皇孫天孫の御事



Handwritten text in cursive script, likely a list or a series of entries, starting with a vertical line on the left side.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or series of entries from the previous page.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or series of entries from the previous page, ending with a vertical line on the left side.

おはるの春の風はよき春の風はよき春の風はよき

類——は

り火の池のほとりにはよき春の風はよき春の風はよき

在る葉平の

深川に流るる水はよき春の風はよき春の風はよき

其は時々の風はよき春の風はよき春の風はよき  
の花よき春の風はよき春の風はよき春の風はよき

つり——は  
共書 春の風はよき

るはよき春の風はよき春の風はよき春の風はよき

類——は  
よき春の風はよき

きよき春の風はよき春の風はよき春の風はよき  
はよき春の風はよき春の風はよき春の風はよき  
きよき春の風はよき春の風はよき春の風はよき

よき春の風はよき

よき春の

よき春の風はよき春の風はよき春の風はよき  
よき春の風はよき春の風はよき春の風はよき  
よき春の風はよき春の風はよき春の風はよき

よき春の

慕<sup>ナ</sup>むに<sup>ナ</sup>長<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>後<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>信<sup>ナ</sup>取<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>君<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>わ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
か<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
女<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>

天曆神製

君<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
と<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>

信<sup>ナ</sup>取<sup>ナ</sup>

慕<sup>ナ</sup>むに<sup>ナ</sup>長<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>後<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>信<sup>ナ</sup>取<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>君<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>わ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
題<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>

万<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>

慕<sup>ナ</sup>むに<sup>ナ</sup>長<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>後<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>信<sup>ナ</sup>取<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>君<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>わ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
物<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
坂<sup>ナ</sup>上<sup>ナ</sup>島<sup>ナ</sup>女<sup>ナ</sup>

慕<sup>ナ</sup>むに<sup>ナ</sup>長<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>後<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>信<sup>ナ</sup>取<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>君<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>わ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
人<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
道<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>

慕<sup>ナ</sup>むに<sup>ナ</sup>長<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>後<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>信<sup>ナ</sup>取<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>君<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>わ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
仁<sup>ナ</sup>和<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>神<sup>ナ</sup>濟<sup>ナ</sup>凡<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>由<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>  
女<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>あ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>

慕<sup>ナ</sup>むに<sup>ナ</sup>長<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>し<sup>ナ</sup>は<sup>ナ</sup>後<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>信<sup>ナ</sup>取<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>名<sup>ナ</sup>に<sup>ナ</sup>君<sup>ナ</sup>と<sup>ナ</sup>わ<sup>ナ</sup>ら<sup>ナ</sup>む<sup>ナ</sup>

おかしき事ゆへに御座りて候はせむと申す候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

申す候事にて候

こけりしきもの

多きものかきておぼしきものおぼしき心せぬなる

歎——す人まわり

まじろり井中へまじろり信へたはまじろり昔もまじ

女の——ふまじろりたのしきもの——

まじろり——

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

洞川水まじろり花やまじろりまじろり花のまじろりまじろり

延長高岸時折家乃まじろりまじろりまじろりまじろり

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

まじろり——

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

歎——す伊勢

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

まじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろりまじろり

いふ人志事

一原指下らうと信ふ時兼あめ事  
この信ふ女と申くおもひの信ふ事  
かゝる事して信ふ事あり

本院待按

それらぬしと思はれし事あり

頼しはよふ人志事

ちりぬの信ふ事ばら書はれり

おれし信ふの事あり

延長河村中一文字

費之

おれし信ふの事あり

かゝる事して信ふ事あり

おれし信ふの事あり

延長河村

おれし信ふの事あり

おれし信ふの事あり

おれし信ふの事あり

あつ火のついでにゆいゆいといふあつたゆいゆいといふ

えん良のついでにゆいゆいといふあつたゆいゆいといふ

いおまよとよとせしゆいゆい

いおまよとよとせしゆいゆい

あつたゆいゆいといふあつたゆいゆいといふ

いおまよ

あつたゆいゆいといふあつたゆいゆいといふ

いおまよ

あつたゆいゆいといふあつたゆいゆいといふ

いおまよ

あつたゆいゆいといふあつたゆいゆいといふ

いおまよ

あつたゆいゆいといふあつたゆいゆいといふ

いおまよ

いおまよ

いおまよ

いおまよ

いおまよ

いおまよ

いおまよ

いおまよ

拾遺和歌集卷第廿

長傷

いしりりしゆりなをさされて又の年風雲杯の  
花さうりし家の花さうりし  
をぬふといふ題とよみ侍る

小野まを政大和

杯花うさけりゆりなをさして又の年風雲杯の

平魚風

雨氣の色のしめる杯花うさよの春と色人とすらん

清原え補

花のまをさる昔のうらみしめはれぬおの病はけ

大中長能直

杯花うさけりゆりなをさして又の年風雲杯の

出乃平とよみ侍る

大細言延光

花のまをさる昔のうらみしめはれぬおの病はけ

中細言延光

花のまをさる昔のうらみしめはれぬおの病はけ

花のまをさる昔のうらみしめはれぬおの病はけ

伊予の散や入れば花のまをさる昔のうらみしめはれぬおの病はけ



天曆沖門がくれぬく又のこゝろ月首  
文内てうゆみうろこふれりしや

女苑人共庫

さかきそまめ増かしちやめは思地山跡  
あつそりししゆんまのやう火  
こまこちかりゆきさる後の幸たとい  
てゆんるとして

栗田右大臣

悪くやめやめいかりか  
おきまはたのしんまかたれしけふ小木や

ろふれりしや

石大臣

あつそりししゆんまのやう火  
初から花と人れ許しあうとて

あふ道信おと

あつそりししゆんまのやう火  
あつそりししゆんまのやう火  
てすみのみらふ

天曆沖製

あつそりししゆんまのやう火

書らるるなりて物々を以て凡の衆に  
吹物をいし  
大武國多

おしよや世の凡の衆に  
申文かたれぬての年れ世の衆に  
ありてと凡の吹物いし  
し

天曆所製

世の衆に  
書しゆりて又の年の世の衆に  
竹く  
人まら

も年をく世の衆に

朱雀院に所中九日の法中  
池乃むく小舟のま

指中納言教書

志あてきお書か  
世の衆に

物  
よめ人まら

か  
眼めきい

お衣をくしてすつる海に... 増えぬるまうら...  
ゆるぬく... 其意の海のとろ...  
恒徳公に船ぬき...  
藤原道信のト

眼あれ... 舟のふ... 舟のふ...  
舟のふ... 舟のふ...  
舟のふ... 舟のふ...  
舟のふ... 舟のふ...  
舟のふ... 舟のふ...

大なる巻

お衣あひみ... 舟のふ... 舟のふ...

幸ゆれといぬる人... 舟のふ... 舟のふ...

題志... 舟のふ... 舟のふ...

王深乃長の神ハ... 舟のふ... 舟のふ...

挙賢... 舟のふ... 舟のふ...

天延二年九月十六日同日卒

漁は云れ小方... 舟のふ... 舟のふ...

あま... 舟のふ... 舟のふ...

昔み物... 舟のふ... 舟のふ...

ちげく... 舟のふ... 舟のふ...

その中... 舟のふ... 舟のふ...

あし 右京の若公任

きよみゝの世に思ふかゝる世にわかれの世に思ふかゝる世に  
おちよゝみくもそゆへに思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
ゆゑに思ふかゝる世に思ふかゝる世に 伊勢

なほ思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
物 思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
よみ人志す

ふいに思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
吹つよみくもそゆへに思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
しきり 清原元衡

思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
子よを思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に

平兼盛

きよみゝの世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
大細玄輔を思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
きよみゝの世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
せきつちんかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
ゆゑに思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
有原兼盛

はなはた思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に  
はなはた思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に思ふかゝる世に

うんき利言つんころちくかりく又の  
年部ふとまいて

伊勢

志すれの御てまひんするしひも入るかかひも  
伊せもまゝらるちよししはらりて

平定文

思ふつひのつらさをかゝりてそのへんはせんか  
申納え善物なりとらりて侍々さるる  
とよふしにせしむるまゝにしておのれに侍々せ  
し

伊勢

志すれに幸ふ言ふは人のおのれに侍々せ  
りあひかたりに後ひよにおひたりし人  
かよひしれりしきりかたし

よみ人

いかにかたにの言ふは人のおのれに侍々せ  
子あひかりけり人らひたりし春さるる  
まひしつひの世におひたりし人らひり  
て侍々せ

まは花びらみちと菊くらしき  
しとちりし侍々

甲務

馬はしてはまらむ後ありしつら若くするもえん  
じぬらんましくれたりて

妻もいほやめいよひのちのちかひたひりた

題一原 よみ人まきみ

せ中がいらして果くはふやうまぢい

まにこのう解ちめかりて後よみゆき

人まきみ

たうぢまといひいひいあははにせのういひぢ

のまののまのののののののののののののの

しんあかりりきる人まきみ

はつははるわの成りぬくの花にゆきそるは

紀女則ありしつらよみ人まきみ

人まきみ

あつははるわの成りぬくの花にゆきそるは

あつははるわの成りぬくの花にゆきそるは

あつははるわの成りぬくの花にゆきそるは

あつははるわの成りぬくの花にゆきそるは

人まきみ

あつははるわの成りぬくの花にゆきそるは

まゝにその心(ひ)をたしめたるかな  
いふもなきに情(こころ)ありけり  
を中(な)にけりて是(こゝろ)を  
たしむる心(こころ)をたしむる  
心(こころ)をたしむる心(こころ)  
を中(な)にけりて是(こゝろ)を  
たしむる心(こころ)をたしむる  
心(こころ)をたしむる心(こころ)

紀費(きひ)

いふもなきに情(こころ)ありけり  
を中(な)にけりて是(こゝろ)を  
たしむる心(こころ)をたしむる  
心(こころ)をたしむる心(こころ)  
を中(な)にけりて是(こゝろ)を  
たしむる心(こころ)をたしむる  
心(こころ)をたしむる心(こころ)

朱雀院(すざくえん)にせよ  
あはれなきに情(こころ)ありけり  
を中(な)にけりて是(こゝろ)を  
たしむる心(こころ)をたしむる  
心(こころ)をたしむる心(こころ)

所(ところ)

いふもなきに情(こころ)ありけり  
を中(な)にけりて是(こゝろ)を  
たしむる心(こころ)をたしむる  
心(こころ)をたしむる心(こころ)  
を中(な)にけりて是(こゝろ)を  
たしむる心(こころ)をたしむる  
心(こころ)をたしむる心(こころ)

所(ところ)

みふ人乃命とありてそのまじりてまじりてまじりて  
そのまじりてまじりてまじりてまじりて

志すかみ

まはれ入るれまじりてまじりてまじりてまじりて

題とす

沙弥満誓

よれ中よりまじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりて

てまじりてまじりてまじりてまじりて

陳相方あつ

契りまじりてまじりてまじりてまじりて

題とす

淡人

山寺の入おの種のかみまじりてまじりて

はゆまじりてまじりてまじりてまじりて

つけておき

孝慈保胤

大月記

まじりてまじりてまじりてまじりて

題とす

淡人

まじりてまじりてまじりてまじりて

はゆまじりてまじりてまじりてまじりて

あまのまじりてまじりてまじりてまじりて

藤原高直



世にあらざるものありしに白雲の如く  
眠る侍を以てしつと侍を女のため  
まにちりぬとてしつと

よしぬ

長保の色は我の如く思ふと世にあらざるものあり  
ぬ

よみ人志す

長保の衣はるるに思ふと世にあらざるものあり  
成信皇家の如く侍を以て大弁に成  
つとふしつと

成信 長四位下九近侍

皇家 長四位下九近侍  
長保二年二月二日出家

右本の書云

思ふ人にも有るものありといつといひてすくすく  
かたむかへる統理より以てしつと侍を  
を志すといふ家一侍とすといつと

三

長保の如く凡いふとつとつとつとつとつとつと  
女院中八講持物のかつとつとつとつとつとつと  
はくつとつとつとつとつとつとつとつとつと

女院

よはくともし川の流るはまのぼすあはれり  
天曆所時秋さくしの文の神代せき  
ぬししとせゆらるとまじせぬよれやう  
てうのまじけりて神代補をこまじせぬ

あつ時 神代

いしと志よと思ふやちとけりあまの禰は  
為神初下善門ちりて神代書  
ゆく又の目おれり流るるかりゆは  
流るるよちのよまじりてゆらるよれ乃  
おしちりゆれし

春文木更道總母

菊のよのよらし流るるよちのよれは  
尤大将海時白川よて流るるよちゆら

よ 実方お下

あつりのあふ余もけりしゆらよの上れと  
なまらしいゆらるるくはゆゆ  
なれしえむゆらるるゆのまよれ  
かけらるるはしゆのゆらるるよ

ゆら

あつりのあふ余もけりしゆらよの上れと

伊弉册上人の御書

雅後女式部

晴るるのりくくも道も入るるすももに照せのぼれ月

松葉と並べしよよみゆはる

仙花はゆ

松葉はもろけき施とあかか所もあてしるるるわたり

市門よりいしはすもくはすも

元也上人

一髪と菊すいり保院松いふ人の道のごうよははわらわ

天明寺右山階寺いあわ松跡はあまのしり

元也上人の御書

みろらわもりの二のひらうもり一昔の分あつたこれ

大僧正行基よんゆいひあま

清花娘と我あましとふとまもてはりあいに水汲つては

そくまよやうまそくしてゆいてはあまのひんかあまやま

南天草下り東大寺法養よあひよま提

つあひいせいよまにひあまのりきまのりあま

具山れ秋迦のみま一人の契てしき如くらせとあまのり

あま 彼羅門僧正

ふりあま一人の契てしき如くらせとあまのり

有徳太子片畧の道入の事なるが  
餽ある人みらのがなりしもかたむの  
まよふく馬の事なりし事かゆり  
てしらすもよきなりし事かゆり  
まよふく馬の事なりし事かゆり  
こといひゆるすもよきなりし事  
りし事なりし事なりし事なりし  
まよふく馬の事なりし事かゆり

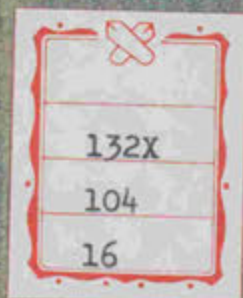
まよふく馬の事なりし事かゆり  
まよふく馬の事なりし事かゆり

まよふく馬の事なりし事かゆり  
まよふく馬の事なりし事かゆり  
まよふく馬の事なりし事かゆり

まよふく馬の事なりし事かゆり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The handwriting is dense and fills most of the page. The script is characteristic of the late 17th or early 18th century. The text is written in a single column, starting from the top left and moving down towards the bottom right. The ink is somewhat faded in places, and the paper shows signs of age and wear.





132X  
104  
16